

琉球大学学術リポジトリ

小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する研究 (1) ー意思表示認知尺度の作成ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, 幹夫, 知花, 優希 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/937

小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する研究 (I)

— 意思表示認知尺度の作成 —

平田 幹夫* 知花 優希**

A Study on Pupils' Self Expression in through their Active Participation in an Element Classroom

— Developing a Recognition Scale of Self Expression —

Hirata Mikio Tibana Yuuki

【はじめに】

文部科学省(2003)は、平成15年度より①個に応じた指導の充実②学習意欲や学力の質の向上③個性能力の伸長④英語力・国語力の増進からなる「学力向上アクションプラン」に取り組んでいる。個に応じた指導の充実の具体的な取り組みにおいては、小学校では算数を中心に習熟度別の少人数クラス編成による授業が行われている。筆者はそのような授業を見る機会が多くある。どのような授業形態においても、「できた人は手を挙げてください」「分かる人は手を挙げてください」という教師の言葉に、ここでも決まった子どもたちが元気な声で挙手している。また、「質問したいことがあったら手を挙げてください」という教師の言葉に、決まった子どもたちが元気な声で挙手している場面である。いずれにも手を挙げない子どもがいる。これでいいのだろうかという疑問が常に残る。意思表示をしない子どもたちはどのような気持ちで授業を受けているのだろうか。

徳島(2002)は教師が授業中、答えを求めて質問した時の子どもの反応を5つのタイプに分けている。「積極的に手を上げ、進んで発表しようとする子」「わかっているけれども何となく恥ずかしくて、うまく答えられない子」「発表することや表現することが苦手な子」「答える意欲がなく答えないようにする子」「問題の意味が理解できなくて答え

られない子」である。このような子どもたちの特性を意識した授業をどれだけの教師が行っているだろうか。個に応じた授業の充実をより確かなものにするには、授業において、質問や発表等の意思表示が自由にできる子どもたちの育成にかかっているといても過言ではないだろう。

子ども一人ひとりが大切にされ、子ども一人ひとりが生き生きと輝いている授業は、「分からない」とき、「分かる」ときに自分の意志で挙手し、意思表示している子どもの姿が見える授業である。また、子ども一人ひとりが自由に意思表示できる授業は、自己存在感、自己効力感、自尊感情を高めるような授業であり、「楽しい、わかる、できる」授業につながるのではないだろうか。

藤生(1991)は、小学校の授業で意見発表や知っている答えを発表するときの挙手を促すには、自己効力、結果予期、結果価値のいずれをも考慮する必要があると述べている。しかし、分からないことに対する質問等の挙手行動を即す要因についてはふれていない。

意思表示を規定している要因を明らかにすることによって、子どもをより深く理解し、子ども一人ひとりが授業で自由に意思表示できるような支援のてだてを講じることができるであろう。平田(1996a)は、入学直後の中学1年生(222人)に質問紙調査を行い、授業中の発表や質問などの「意思表示」を規定している要因として、自己効力感

* 琉球大学教育学部

** 与那原町立与那原東小学校

認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、教師信頼度認知を取り上げ、それぞれの認知尺度を作成、それらの総得点を意思表示認知得点として分析している。

そこで本研究の目的は、平田（1996a）が作成した意思表示認知尺度を参考に、小学生の授業における意思表示認知尺度を作成することである。

【方法】

1. 調査対象

本研究は県内の小学校3校における小学3年生165名、4年生281名、5年生300名、6年生307名計1053名を対象に「小学生の授業における「意思表示」に関するアンケート」を実施し、行った。そのうち、記入漏れや記入ミスがあったものを除くと3年生5クラス156名（男子81名、女子75名：有効回答率94.55%）、4年生9クラス276名（男子145名、女子131名：有効回答率98.22%）、5年生9クラス285名（男子132名、女子153名：有効回答率95.00%）、6年生9クラス298名（男子158名、女子140名：有効回答率97.07%）、計1015名（男子516名、女子499名：有効回答率96.39%）であった。

2. 調査時期

2002年10月上旬から12月上旬に実施した。

3. 調査手続き

筆者が本質問紙を協力校に持参し、内容や実施手順の説明を行った。アンケート実施においては、本調査が学校の成績に一切関係がないことを事前に説明してもらった後、担任が質問項目を読み上げ、児童がその答えを質問紙に書き込む形態を取った。

4. 調査尺度

小学生の授業における質問や発表をとおした意思表示に関する調査を行うために、平田（1996a）が『中学生の授業における「意思表示」に関する研究』で用いた授業における意思表示に関する関連6要因である自己効力感認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、教師信頼度認知のそれぞれの質問項目について内容は変え

ず、小学生にわかりやすい言葉を用いて意思表示認知尺度（37項目からなる）を作成した。

なお、全ての項目は「まったくあてはまらない（1点）」、「少しあてはまる（2点）」、「よくあてはまる（3点）」、「とてもよくあてはまる（4点）」の4件法で回答させた。得点が高いほど授業における質問や発表などの意思表示認知が高いことを意味する。ただし、自己効力感認知の一部の項目とコスト認知の全ての項目については逆転項目として処理した。

【結果】

1. 因子分析による尺度項目の分析

意思表示認知尺度の構造を検討するために、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、固有値1以上という基準から7因子37項目が抽出された。その内、どの因子にも低い負荷しか示さない3項目（6⑦、テストのことを考えると、わからないところはすぐに質問しないとそんなをするような気がします。7⑤、好きな先生の授業では、質問や発表はするべきです。8⑦、こわい先生の授業でも、発表や質問はできます。）と、他の項目と比較して異質な値を示した2項目（3③、わたしは授業で答えに自身がない時は、手をあげることができません。3④、わたしは授業中、分からないことがあっても、手をあげることができません。）を除いた。

そして残りの32項目に対し再度、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、Table 1に示すように6因子が抽出された。この結果は、平田（1996a）と同じ結果が得られた。累積寄与率（59.321%）もかなり高い値が得られたので、意思表示認知尺度として使用する。

第I因子は、「8④、話しやすい先生の授業は、質問や発表がやりやすいです。（.742）」「8②、どんな小さなことでも相談にのってくれる先生の授業では、質問や発表がしやすいです。（.730）」「8⑧、親切に教えてくれる先生の授業では、質問や発表がしやすいです。（.731）」など7項目に高い因子負荷量を示しており、教師との信頼関係による影響を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「教師信頼度認知」

と命名した（寄与率13.183%）。

第Ⅱ因子は、「5②. 発表する時、答えがまちがっているのではないかと心配になるのがいやです。(808)」5④. 発表してまちがうと、自分は頭が悪く思われそうでいやです。(791)」5③. 発表してまちがって、はずかしい思いをするのがいやです。(769)」など6項目に高い因子負荷量を示しており、授業中に意思表示をする際に感じるコストの程度を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「コスト認知」と命名した（寄与率11.775%）。第Ⅱ因子については、いずれも逆転項目として処理した。

第Ⅲ因子は、「7④. 好きな先生、きらいな先生に関係なく、質問や発表はすべきです。(715)」7⑥. 友だちにわらわれても、質問や発表はすべきです。(701)」7③. 質問や発表をすることはいいことです。(636)」など5項目に高い因子負荷量を示しており、授業中に質問や発表をすることは価値があることだという認知の程度を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「結果価値認知」と命名した（寄与率9.709%）。

第Ⅳ因子は、「4④. わたしは友だちとなかよくできている時は、楽しく発表や質問ができます。(764)」4③. わたしは、仲のいい友だちが同じグループにいと、何でもできそうな気がして、先生に何でも質問できます。(738)」4①. わたしは、友だちにおうえんされると、発表や質問がしやすくなります。(673)」など4項目に高い因子負荷量を示しており、授業中の質問や発表が友人からの影響の程度を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「友人関係認知」と命名した（寄与率9.043%）

第Ⅴ因子は、「6②. 質問したり発表したりすると、成績が上がるような気がします。(729)」6③. だれもとけない問題を自分だけがとけたとき、先生に誉められそうな気がします。(655)」6④. 質問や発表をしていくうちに、自信が出てきそうな気がします。(614)」など6項目に高い因子負荷量を示しており、授業中に質問や発表をすると自分にプラスになる、利益がもたらされるという認知の程度を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「利益認知」と

命名した（寄与率9.022%）。

第Ⅵ因子は、「3②. わたしは授業で分かる時は、手をあげて発表できます。(771)」3⑤. わたしは授業で答えに自信があるときには、手をあげて発表できます。(754)」3⑥. わたしは授業中、分かっている、手をあげて発表することができません。(483)」など4項目に高い因子負荷量を示しており、授業中に質問や発表がうまくできるといふ確信の程度を調べる項目から構成されているため、この因子を平田（1996a）と同様に「自己効力感認知」と命名した（寄与率6.590%）。

2. 意思表示認知尺度の信頼性及び性差の検討

(1) 教師信頼度認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は2.34～2.73の範囲にあり、項目の標準偏差は.986～1.092の間にあった。この7項目の全体の合計得点の平均は19.61で、標準偏差は6.126であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、項目－全体相関係数（以下、I－T相関）を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数 r の範囲は.744～.787であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.882で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの7項目について、意思表示における教師信頼度認知尺度として採用することにした（Table 2）。

② 性差

男子（ $N=516$ ）の平均値が18.97、標準偏差が6.314、女子（ $N=499$ ）の平均値が20.27、標準偏差が5.858であった。教師信頼度認知の性差を見るために対応のない t 検定を行った結果、 t 値は-3.402であった。また、有意確率を求めたところ、1%水準で男女間で有意な差が見られ、授業における意思表示において女子のほうが男子より教師信頼度認知が高いことが認められた。（Table 8）。

Table 1 意思表示認知尺度に関する因子分析の結果

	因子						共通性
	I	II	III	IV	V	VI	
【第I因子：教師信頼認知】 $\alpha = .882$							
8④ 話しやすい先生の授業は、発表や質問がやりやすいです。	.742						.658
8② どんな小さなことでも相談のってくれる先生の授業は、質問や発表がしやすいです。	.730						.661
8③ 親切に教えてくれる先生の授業は、質問や発表がしやすいです。	.731						.638
8① 私に話しかけてくれる先生の授業は、発表や質問はしやすいです。	.687						.615
8⑤ 楽しい授業の時は発表や質問が楽しくなります。	.618						.591
8③ つまらない質問だと思っていたのに先生が「いいところ」に気がつきましたね」とみんなの前ではめてくれると、もっと発表や質問がしたくなります。	.607						.614
8⑥ 先生がいっしょうけんめい教えていたら、自分もがんばろうと思います。	.573						.594
【第II因子：コスト認知】 $\alpha = .859$							
5② 発表する時、答えがまちがっているのではないかと心配になるのがいやです。		.808					.663
5④ 発表してまちがうと、自分は頭が悪いと思われそうです。		.791					.636
5③ 発表してまちがって、はずかしい思いをするのがいやです。		.769					.617
5⑥ グループを代表して発表する時に、まちがった答えを言わないかと心配になるのがいやです。		.749					.576
5① 質問すると、「これぐらいも分からないのか」とみんなに思われそうです。		.755					.577
5⑤ 質問や発表する時に、きんちょうするのがいやです。		.667					.534
【第III因子：結果価値認知】 $\alpha = .807$							
7④ 好きな先生、きれいな先生に関係なく、質問や発表はするべきです。			.715				.596
7⑥ 友だちにわらわれても、質問や発表はするべきです。			.701				.605
7③ 質問や発表をすることはいいことです。			.636				.552
7① 分かる時には手をあげて発表するべきです。			.623				.603
7② 分からない時には手をあげてすぐに質問するべきです。			.644				.540
【第IV因子：友人関係認知尺度】 $\alpha = .808$							
4④ わたしは、友だちとなかよくできている時は、楽しく発表や質問ができます。				.764			.685
4③ わたしは、仲のいい友だちが同じグループにいと、何でもできそうな気がして、先生に何でも質問できます。				.738			.648
4① わたしは、友だちにおうえんされると、発表や質問がしやすくなります。				.673			.571
4② わたしは、友だちが発表してほめられると、自分も発表や質問ができそうな気がしてきます。				.640			.617
【第V因子：利益認知】 $\alpha = .823$							
6② 質問したり発表したりすると、成績があがるような気がします。					.729		.602
6③ だれもとけない問題を自分だけがとけたとき、先生にほめられそうな気がします。					.655		.562
6④ 質問や発表をしていくうちに、自信が出てきそうな気がします。					.614		.662
6⑤ 質問や発表ができるようになると、自分が明るくなるような気がします。					.597		.591
6⑥ 質問や発表ができるようになると、勉強にやる気が出てくるような気がします。					.488		.543
6① 質問したり発表したりすると、分からないところが増えるようになります。					.505		.430
【第VI：自己効力感認知】 $\alpha = .692$							
3② わたしは授業で分かる時は、手をあげて発表することができます。						.754	.700
3⑤ わたしは授業で答えに自信がある時には、手をあげて発表できます。						.771	.693
3⑥ わたしは授業中、分かっているのに、手をあげて発表することができません。						.483	.421
3① わたしは授業中、分からない時に、手をあげて質問することができます。						.468	.388
固有値	4.218	3.768	3.107	2.894	2.887	2.109	
寄与率 (%)	13.183	11.775	9.709	9.043	9.022	6.590	
累積寄与率 (%)	13.183	24.958	34.667	43.710	52.732	59.321	

(2) コスト認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は2.720～3.215の範囲にあり、項目の標準偏差は.937～1.031の間にあった。この6項目の全体の合計得点の平均は17.71で、標準偏差は4.518であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、I-T相関を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数rの範囲は.706～.807であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.859で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの6項目について、意思表示におけるコスト認知尺度として採用することにした (Table 3)。

② コスト認知の性差

男子 (N=516) の平均値が18.63、標準偏差が4.400、女子 (N=499) の平均値が16.75、標準偏差が4.442であった。コスト認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は6.774であった。また、有意確率を求めたところ、.1%水準で男女間で有意な差が見られ、授業における意思表示において女子のほうが男子よりコスト認知が高いことが認められた (Table 8)。

(3) 結果価値認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は2.38～3.00の範囲にあり、項目の標準偏差は.967～1.085の間にあった。この5項目の全体の合計得点の平均は14.87で、標準偏差は4.289であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、I-T相関を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数rの範囲は.709～.747であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性 (クロンバックの α 係数) を検討した。その結果、 α 係数は.807で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの5項目について、意思表示における結果価値認知尺度として採用することにした (Table 4)。

② 性差

男子 (N=516) の平均値が14.60、標準偏差が4.456、女子 (N=499) の平均値が15.16、標準偏差が4.049であった。結果価値認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-2.089であった。また、有意確率を求めたところ、5%水準で男女間で有意な差が見られ、授業における意思表示において女子のほうが男子より結果価値認知が高いことが認められた (Table 8)。

Table 2 教師信頼度認知尺度の各項目平均と標準偏差ならびにI-T相関 (N=1015)

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
8①私に話しかけてくれる先生の授業は、発表や質問はしやすいです。	2.34	1.019	0.768**
8②どんな小さなことでも相談にのってくれる先生の授業は、質問や発表がしやすいです。	2.37	1.092	0.784**
8③つまらない質問だと思っていたのに先生が「いいところに気がつきましたね」とみんなの前でほめてくれると、もっと発表や質問がしたくなります。	2.27	1.073	0.778**
8④話やすい先生の授業は、発表や質問がやりやすいです。	2.45	1.020	0.787**
8⑤楽しい授業の時は発表や質問が楽しくなります。	2.68	1.039	0.762**
8⑥先生がいっしょけんめい教えていたら、自分もがんです。	2.73	1.986	0.744**
8⑧親切に教えてくれる先生の授業は、質問や発表がしやすいです。	2.67	1.008	0.770**

**p<.01

Table 3 コスト認知尺度の各項目平均と標準偏差ならびにI-T相関 (N=1015)

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
5①質問すると、「これぐらいも分からないのか」とみんなに思われそうでいやです。	3.105	.9660	0.746**
5②発表する時、答えがまちがっているのではないかと心配になるのがいやです	2.754	.9660	0.807**
5③発表してまちがって、はずかしい思いをするのはいやです。	2.720	1.028	0.783**
5④発表してまちがうと、自分は頭が悪く思われそうでいやです。	3.215	.937	0.785**
5⑤質問や発表する時に、きんちょうするのがいやです。	3.018	.969	0.706**
5⑥グループを代表して発表する時に、まちがった答えを言わないかと心配になるのがいやです。	2.894	1.031	0.770**

(注) 全ての項目において逆転項目として処理した。 **p<.01

Table 4 結果価値認知尺度の各項目平均と標準偏差ならびにI-T相関 (N=1015)

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
7①分かる時には手をあげて発表するべきです。	2.53	1.004	0.747**
7②分からない時には手をあげてすぐに質問するべきです。	2.39	.967	0.709**
7③質問や発表をすることはいいことです。	3.00	.983	0.733**
7④好きな先生、きらいな先生に関係なく、質問や発表はするべきです。	2.59	1.085	0.785**
7⑥友だちにわらわれても、質問や発表はするべきです。	2.38	1.058	0.736**

**p<.01

(4) 友人関係認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は2.03~2.21の範囲にあり、項目の標準偏差は.999~1.017の間であった。この4項目の全体の合計得点の平均は8.45で、標準偏差は3.204であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、I-T相関を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数rの範囲は.773~.815であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.808で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの4項目について、意思表示における友人関係認知尺度として採用することにした (Table 5)。

② 性差

男子 (N=516) の平均値が8.20、標準偏差が3.265、女子 (N=499) の平均値が8.71、標準偏

差が3.122であった。友人関係認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-2.542であった。また、有意確率を求めたところ、5%水準で男女間で有意な差が見られ、授業における意思表示において女子の方が男子より友人関係認知が高いことが認められた (Table 8)。

(5) 利益認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は2.07~2.39の範囲にあり、項目の標準偏差は.944~1.047の間であった。この6項目の全体の合計得点の平均は15.94で、標準偏差は4.891であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、I-T相関を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数rの範囲は.652~.796であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、

Table 5 友人関係認知尺度の各項目平均と標準偏差ならびにI-T相関（N=1015）

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
4①わたしは、友だちにおうえんされると、発表や質問がしやすくなります。	2.05	1.005	0.773**
4②わたしは、友だちが発表してほめられると、自分も発表や質問ができそうな気がしてきます。	2.03	1.000	0.801**
4③わたしは、仲のいい友だちが同じグループにいと、何でもできそうな気がして先生に何でも質問できます。	2.16	1.017	0.798**
4④わたしは、友だちとなかよくできている時は、楽しく発表や質問ができます。	2.21	.999	0.815**

**p<.01

Table 6 利益認知尺度の各項目平均と標準偏差ならびにI-T相関（N=1015）

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
6①質問したり発表したりすると、分からないところ分かるようになります。	2.36	.944	0.652**
6②質問したり発表したりすると、成績があがるような気がします。	2.39	.1023	0.673**
6③だれもとけない問題を自分だけがとけたとき、先生にほめられそうな気がします。	2.18	1.047	0.672**
6④質問や発表をしていくうちに、自信が出てきそうな気がします。	2.35	.999	0.796**
6⑤質問や発表ができるようになると、自分が明るくなるような気がします。	2.07	1.006	0.746**
6⑥質問や発表ができるようになると、勉強にやる気が出てくるような気がします。	2.30	.997	0.748**

**p<.01

内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.823で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの6項目について、意思表示における利益認知尺度として採用することにした（Table 6）。

② 性差

男子（N=516）の平均値が15.72、標準偏差が5.119、女子（N=499）の平均値が16.17、標準偏差が4.63であった。利益認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-1.490であった。また、有意確率を求めたところ男女間で有意な差は見られなかった（Table 8）。

(6) 自己効力感認知尺度の検討

① 信頼性の検討

項目平均は1.920～3.101の範囲にあり、項目の標準偏差は.881～1.062の間であった。この4項目の全体の合計得点の平均は9.94で、標準偏差は

2.792であった。

そこで、各項目得点と全項目の合計得点について、I-T相関を求め無相関検定を行った。その結果すべての項目において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数rの範囲は.624～.818であった。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.692で、かなりの相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの4項目について、意思表示における自己効力感認知尺度として採用することにした（Table 7）。

② 性差

男子（N=516）の平均値が10.19、標準偏差が2.917、女子（N=499）の平均値が9.68、標準偏差が2.633であった。自己効力感認知の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は2.958であった。また、有意確率を求めたところ

Table 7 自己効力感認知尺度の各項目の平均値と標準偏差ならびにI-T相関 (N=1015)

項目内容	平均値	標準偏差	I-T相関
3①わたしは授業中、分からない時に、手をあげて質問することができます。	1.920	.881	.0627**
3②わたしは授業で分かる時は、手をあげて発表することができます。	2.350	1.004	0.818**
3③わたしは授業で答えに自信がある時には、手をあげて発表できます。	2.570	1.062	0.796**
3④わたしは授業中、分かっているのに、手をあげて発表することができません。	3.101	.918	0.624**

(注) 項目3④については逆転項目として処理した。 ** $p < .01$

ろ、1%水準で男女間で有意な差が見られ、授業における意思表示において男子のほうが女子より自己効力感認知が高いことが認められた (Table 7)。この結果は、平田 (1990) の中学生1年生の結果を指示するものである。

(7) 意思表示認知尺度の検討

① 信頼性の検討

意思表示認知得点と「意思表示」関連要因の関係

教師信頼度認知、コスト認知、結果価値認知、友人関係認知、利益認知、自己効力感認知の各因子得点を各因子に含まれる項目数で除した値の総和を個人の意思表示認知得点とした。この意思表示認知得点の平均値は86.52で、標準偏差は17.954であった (Table 8)。

そこで、意思表示関連要因と意思表示認知得点についてI-T相関を求め、無相関検定を行った。その結果すべての尺度において、1%水準で有意な相関を示した。相関係数の範囲は、コスト認知得点と意思表示認知得点の相関係数 $r = .264$ と低い相関を示したが、その他は.669～.855の間で高い相関を示した (Table 8)。

次に、この尺度の信頼性の検討を行うために、内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.760で、高い相関があるといえ、内的整合性が存在すると考えられる。そこでこの関連6要因について、意思表示認知尺度として採用することにした (Table 8)。

② 性差

男子 (N=516) の平均値が14.558、標準偏差が

3.044で、女子 (N=499) の平均値が14.647、標準偏差が2.862であった。そこで意思表示認知得点の性差を見るために対応のないt検定を行った結果、t値は-.480であった。また、有意確立を求めたところ有意な差は認められなかった (Table 8)。

(8) 意思表示認知と各尺度の相関

自己効力感認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、教師信頼度認知、意思表示認知の得点の総和を意思表示認知として定義した。意志表示認知と各尺度間の相関についてTable 9のような結果が得られた。

意思表示認知と自己効力感認知との間で有意なかなりの相関 ($r = .669, p < .01$) が認められた。友人関係認知との間で有意な高い相関 ($r = .719, p < .01$) が認められた。コスト認知との間で有意な低い相関 ($r = .264, p < .01$) が認められた。利益認知との間で有意な高い相関 ($r = .797, p < .01$) が認められた。結果価値認知との間で有意な非常に高い相関 ($r = .804, p < .01$) が認められた。教師信頼度認知で有意な非常に高い相関 ($r = .855, p < .01$) が認められた。

【考察】

本研究は、小学校の授業における質問や発表をとおした意思表示認知尺度を作成することを目的であった。

小学生の授業における「意志表示」に関する研究を、平田 (1996a) が「中学生の授業における「意思表示」に関する研究」で用いた質問紙に若干の修正を加え、小学校3年生から6年生を対象に調査を実施した。そして因子分析を行った結果、

Table 8 意思表示認知尺度及び各尺度の平均値、標準偏差、t値、 α 係数

	(N=1015 男子 n=516 女子 n=499)		性差 (t 値)	α 係数	
	全体平均値 S D	男子平均値 S D			女子平均値 S D
教師信頼度認知	19.61 6.126	18.97 6.314	20.27 5.858	-3.402**	.882
コスト認知	17.71 4.518	18.63 4.400	16.75 4.442	6.774	.859
結果価値認知	14.87 4.289	14.60 4.456	15.16 4.094	-2.089*	.807
友人関係認知	8.45 3.204	8.20 3.265	8.71 3.122	-2.542*	.808
利益認知	15.94 4.891	15.72 5.119	16.17 4.638	-1.490	.823
自己効力感認知	9.94 2.792	0.19 2.917	9.68 2.633	2.958**	.692
意志表示認知	86.52 17.954	86.31 18.610	86.74 17.264	-0.384	.760

* p<.05 ** p<.01

授業における「意思表示」に関する関連要因として、平田（1996a）の研究と同じく、自己効力感認知、友人関係認知、コスト認知、利益認知、結果価値認知、教師信頼度認知の6因子の存在が示唆された。そして、各因子得点を各因子に含まれる項目数で除した値の総和を個人の意思表示認知得点とみなし分析を行った。以上をふまえて考察する。Table10は、各尺度の性差についての結果をまとめたものである。

「先生がいっしょうけんめい教えていたら、自分もがんばろうと思います。」等の教師信頼度認知については、女子の方が男子より得点が高かった。このことから、女子の方が教師の影響を受けやすく、教師との信頼関係によって意思表示ができる程度が変化することが示唆された。この結果は平田（1996a）が中学1年生に対して行った調査結果

「男子の方が女子より教師信頼度認知が高い」という結果とは異なるものであった。

「発表して間違うと、自分は頭が悪いと思われそうていやす。」などのコスト認知は、全ての項目について逆転項目で処理したため、「得点が高いほどコスト認知が低くなる」として検討した。その結果コスト認知は、女子の方が男子より高いことが認められた。

「質問や発表をすることはいいことです。」などの結果価値認知については、女子の方が男子より高かった。このことから、女子の方が男子より授業中の発表や質問について価値判断しているということが考えられる。

「わたしは、友だちとなかよくできる時は、楽しく発表や質問ができます。」などの友人関係認知については女子の方が男子より高く、男子に比べ

Table 9 意思表示認知と各尺度間の相関係数

	友人関係	コスト	利益	結果価値	教師信頼	意思表示
自己効力感	.344**	.442**	.345**	.411**	.355**	.596**
友人関係		-.006	.615**	.454**	.605**	.764**
コスト			-.101**	.054	-.057	.236**
利益				.589**	.690**	.792**
結果価値					.697**	.791**
教師信頼度						.836**

**p<.01

女子は授業中の発表や質問をする時に友だちの影響を受けるという結果が見出された。この結果は平田（1996a）中学1年生に対して行った調査結果「男子の方が女子より友人関係認知が高い」という結果とは異なるものであった。

「質問したり発表したりすると、成績があがるような気がします。」などの利益認知については全体の性差は見出されなかった。この結果は平田（1996a）が中学1年生に対して行った調査結果「男子の方が利益認知が高い」という結果とは、異なるものであった。

「わたしは授業中、分かっている、手をあげて質問することができません。」等の自己効力感認知は男子の方が女子よりも高く、男子は女子よりも「自分は授業中に発表や質問などの意思表示ができる」と自己認知していることが示唆された。この結果は平田（1996a）が中学1年生に対して行った調査結果と同様であった。

また、意思表示認知について男女差は確認されなかった。この結果は平田（1996a）が中学1年生に対して行った調査結果「男子の方が意思表示認知が高い」とは、異なるものであった。

平田（1996b）は、理科の授業に意思表示の手段として、挙手の代わりに簡易アナライザーで意思表示させる授業実践を行い、意思表示認知得点の上昇でもってその有効性を報告している。

本研究の成果は、授業において子ども一人ひとりが質問や発表等の意思表示を自由に行っているかどうかの評価尺度として授業改善に役に立つのではないだろうか。意思表示認知尺度得点を高めるような授業実践の工夫を行えば、子ども一人ひとりにとって「わかる、できる」と言える授業、「わからない、できない、質問があります」と言えるような「楽しい」授業が構築されたいと考える。

本研究においては、小学校3年から6年までの児童を調査対象にしているにもかかわらず、学年差を考慮した分析を行っていない。この点については次報で報告したいと考えている。

Table 10
意思表示認知及び各尺度における性差の比較

各 尺 度	男 子 - 女 子
教師信頼度認知	男子 < 女子
コスト認知	男子 < 女子
結果価値認知	男子 < 女子
友人関係認知	男子 < 女子
利 益 認 知	-
自己効力感認知	男子 > 女子
意思表示認知	-

【引用文献】

- ・ 文部科学省 2003 文部科学時報 No.1523 4月号 きょうせい
- ・ 徳島泰彦 2002 「授業中、すぐに「わかりません」「できません」と言う子にどう対応するか」 児童心理 10月号 特集「すぐ「できない」という子」 金子書房
- ・ 藤生英行 2002 「「できない」を「まずはやってみよう」の認知に変える」 児童心理 10月号 特集「すぐ「できない」という子」 金子書房
- ・ 平田幹夫 1996a 入学直後の中学生の授業における「意思表示」に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 50, 333-346
- ・ 平田幹夫 1996b 中学生が自由に意思表示できる授業づくり－理科授業における簡易アナライザーの有効性－ 琉球大学教育学部紀要附属教育実践センター紀要, 4, 75-90

【謝辞】

本研究の調査に御協力いただきました、東風平小学校、佐敷小学校、大道小学校の職員及び児童の皆さんに深く感謝いたします。